ず。宋の代、于闐に併され、後、西遼に屬す。明の世、哈實哈兒國と爲り、同末世（千六百年代）瑪哈木特玉布素、亞剌比亞より來りて、自ら派汗の裔と稱し、回部悉く風靡して遂に西域回教の祖と爲る。

第十節　喀什噶爾より葉爾羌に到る

一、英吉沙爾の歡迎

八月二十四日午後一時十八分愈々喀什噶爾を發するに臨み、長將軍及王藩臺に打電して、新疆旅行中の厚遇を謝す。蓋し喀什噶爾以東は、電線の通ずるものなければなり。八時五十五分行程十里餘雅ト（ヤプ）泉（チヤン）に着す。人家五十六戸、內漢人十六戸、印度人七戸、一週一回、市を開くと。途上ペズワット、ペズボテ、ハネレク、カラスの四河を過ぐ、共に木橋を架せり。十餘里程中、初の三分二は人家斷續し、後の三分一は戈壁帶を成せり。是日午前降雨ありしが土質砂利なる爲め、途上深泥の處なきも、若し晴天ならば塵多からん。路幅四米突內外、附近は牧畜盛なり。

二十五日トグロク、ソグロク、ハナカー等、沙漠間に散在する各部落を過ぎて、行程